川・庄内川のこれから

座談会

河原は自然体験の場
街づくりに川を活用
川の恵み評価したい

上下流一体で連携を　松原氏
被災地との信頼大切　西寺氏
市民と行政の協働を　村田氏

公園にありながら、豊かに流れている庄内川。上流域の名古屋市の水を貫流する好ポイント。流域の安心・安全を、ベースに、川との共生を実現させるためには、これから何が必要なのか？。「市民と行政との協働」を一つのキーワードに、川との関係を見つめ直してみたい。

出席者

西寺　雅也氏　多治見市長
松原　武久氏　名古屋市長
村田　進氏　国土交通省中部地方整備局長
コーディネーター
辻本　哲郎氏　土岐川・庄内川流域委員会委員長　名古屋大学大学院教授

土岐川・庄内川の整備をどう進めるのか。熱心に議論する（左から）辻本教授、松原市長、村田局長、西寺市長の皆さん＝名古屋観光ホテルで

辻本　川から恵みを得るためにはまず安全面がしっかりしていなければなりません。

松原　河川の安全性の問題は東海豪雨のときに対策本部にいて強く実感しました。アメダスを見ていたら、ちょうど庄内川に沿って雲の厚みを示す赤いエコーが、最上流の夕方あたりまでびっしりと出ていた。すると三、四分から四十分後には二流に位置する枇杷島へ水が来ているような状況でした。庄内川は一級河川のなかでも起伏に富む市街化されているところが多い河川です。上流から下流まで、そのようについていますが、その水がすべて太き川に集まって一体となって整備の計画を立て、実施しなければならないことしみじみ思いました。というのも、それぞれの市町では極めて効率的に水が流れるようにつくっていますが、その水がすべて太き川に集まってしまいます。庄内川という青龍の部分に多くの水が流れてきて、川の容量を超えてしまった。それが東海豪雨の災害につながったのだと思います。だから河川を上下流一体的に見なければなりません。

西寺　多治見市も東海豪雨のときに二百戸近い床上浸水が両座で出ました。土岐川の水が溢れたわけではないのですが、内水が流れなくて水害が起きてしまった。それからすぐにホームページに危険所の画像を出すことにしました。何カ所かポイントになる場所にカメラを設置して、すぐに情報として見ることができるようになっています。また市水に対して、被災地の人たちへの情報交換をはじめました。信頼関係をつくるために職員が出かけていって話を直接聞くようにしています。災害時には信頼関係が大切です。

村田　東海豪雨の後にかなり整備を進めましたが、それは土岐川・庄内川の本川、大きな被害を出した新川が中心でした。その他の支川には、まだ整備が遅れているところがあると思います。弱いところを見つけ出して、早く対策を講じていくことが大切だと考えています。また、高度成長期に社会資本全体の整備を一生懸命やってきたわけですが、その当時設置したものがこれからメンテナンスの時期を迎えます。きめ細かなメンテナンスを心がけたいと思います。

松原　宅地開発が進んで水田がなくなってしまったところでは、雨が大量に降ったときに広く浅く水を貯める機能がなくなっています。その機能を補うために、雨水流出を調節するような施設を活用していくつかの施策を組み合わせています。

西寺　多治見市でも開発は大分収まってきましたが、昭和の高度成長期に造成された宅地から流れる雨水を貯める公園地下に大きな貯留タンクをつくることで安全になりました。道路の舗装でも雨がすぐに下水に流れるのではなく、一旦、地面の下に貯めることができるような透水性舗装に変えるなど、いくつかの施策を組み合わせています。

村田　今後の川づくりをどう進めていけばよいのかを考えるために、国土交通省では二十年後、三十年後を視野に入れた河川整備計画を作成しています。庄内川水系の計画づくりが、土岐川庄内川コレカラプロジェクトです。流域全体の関係者が知恵を出し合って、意見を出し合って進めていますが、市民と協働することで大変な力を発揮しています。同時に専門的な知識も必要ですから、学識経験者を中心とした流域委員会で議論をしています。河川整備計画の策定の段階で、流域全体の人たちが川づくりに主体的に参加できる仕組みを作り上げたいと考えています。

松原　市民が育つ、それを後押ししていくこと、行政と市民がもっと協働して川の環境を良くしていく努力が大切です。堀川1000人調査隊、矢田・庄内川を考える会など、さまざまな角度から川の問題を考える市民団体が出て来ています。また、名古屋市と長野県の木祖小学校の親子が参加して、「ドングリ」の苗木を植樹する「木曽川さんありがとう」のようなこれから上流の連携も膨んでいます。庄内川でも、下流の市民はもっと上流の方々に水源林の手入れをしてもらうという認識が必要でしょうね。そして、自治体が市民を巻き込んで川について考えていくことが大事だと思います。市民には、河川管理者である国と自治体との一緒の協働の役割を期待したいですね。

西寺　多治見市土岐川観察館はまさに市民が中心の施設です。もともと市民の皆さんから出たプランで、半分ボランティアのようなかたちで運営されています。現在では河川に関する情報の発信源になっています。市之倉など、地域住民による森づくりもはじまっています。また、下水道を整備するときに街を流れる小さな川の上を道路や遊歩道にしてしまって、生活に身近な川がなくなってしまいました。もっと川に親しんでいただくためには、この辺りから考え直す必要がありそうです。市民の皆さんが主体的に関わっていかないと河川から背を向けてしまうということになってしまうのだと思います。

村田　本来、川は自然の宝庫です。それをどうやって育てて、利用していくのかを考えると、多様な可能性が出てくると思います。さまざまな立場から意見を出していただくことで、今まではお互いに遠慮なく様々なつき合い方が生まれてくるのだと思います。ぶつかり合いながら自分たちで意見の調整をしたり、専門家の知識を導入して調整することが大切だと思います。まずは可能性を探り、多様な意見をぶつけ合うべきだと思います。

松原　そういう意味では川で遊ぼうという気運が高まってきているのはいいことですね。川に行くと「こわい子はここで遊ばない」と言いてありますが、それでは前に進まないと思います。「こわい子はこで遊ぼう」という川にならなければならない。川の水質が地域基準に達していなくても、遊べる人がいれば基準に達するようにしよう、という人も増えてくるはずです。基準に達していないから側に寄るなというのではいつまでたっても改善されない。

西寺　最近は、水量も安定しています。はかなりの深さがあります。ですから街のなかでボートやカヌーで遊んだりできるようになってほしいですね。

辻本　市民が川と親しんだれば、どこに問題があるのかが自ずと見えてくるのかもしれませんね。

松原名古屋市長

辻本　中部の心臓部に位置し、動脈でもあり静脈でもある庄内川です。庄内川を五十年、百年後の世代にどのようなかたちで残していくのかは、十分議論されなければならないことだと思います。

松原　名古屋市民は庄内川と市内に流れる堀川を一体として見ています。前者が自然の川、後者が人工の川ですが、堀川の起点は庄内川で、ふたつはつながっています。ですから、堀川をきれいにしていくことは庄内川をきれいにしていくことと同じだと思います。

西寺多治見市長

私は矢田川のもとで生まれ育ちまして、川には大愛憎があります。子供の頃は「セッショウ橋白下ショウ大臣」と言われておりまして、いつも魚取りをやっていました（笑）。庄内川には自然が豊かな河原がたくさんあります。そのような場所を憩いの場として使っていくことは自然体験としても大事なことです。

辻本　江戸時代に開削された堀川は名古屋のシンボル。城下町から発展した名古屋にとって、それは頭のようなもの。そして背骨にあたるのが庄内川と言えます。名古屋市から三十キロほど上流の多治見市にいかがですか？

西寺　多治見市は街の中心を土岐川が流れています。私は川と共にあるこの街を幼いときから当たり前だと思ってきました。多治見は「美濃焼」という陶磁器の産地として知られていますが、そのために戦後は粘土で真っ白な川になっていたときもありました。汚れてもいましたし、学校では川に近寄らないように教育をしてきましたから、市民が川に見向きもしなくなった時期がありました。しかし、最近ではかなりきれいになって、今年の夏は川で泳いでいる人を見かけました。これからも街の真ん中の川として、街づくりにどう活かしていけるかが大事な問題だと思っています。

世界に比べて日本では、川に背を向けて住んでいるところがあります。川に向けて街は川を利用しながら暮らしをつくってきましたし、これからも川と共に暮らしをつくっていくことになるのだと思います。

村田　一番には川の「恵み」をしっかり評価しないといけないと思います。庄内川が持っている潜在能力をうまく引き出しながら川を活用していくことが大切です。先人がきれいになっていく、衛やかになっていくことはこれまであまりなかった。「川と共にある」「川と向かい合う」街づくりができないものかと考えています。

辻本　川と共に前向きに生きようとした時代と同様に、川に意識が向いていくのが自然な姿なのでしょう。

村田中部地方整備局長

辻本名大大学院教授

企画・制作　中日新聞広告局

参加するにはどうしたらいいの？

各地でいろんなスタイルのイベントを開催しています。お気軽にご参加ください。

みんなで来てね！ オープンハウス in 栄

スケジュール（予定）